

11月中旬の週末だった。そういえば、この秋は、まだ、ゆっくりと紅葉を見ていなかったことに気がついた。さて、どこに行こうか。

11月1日に、福島民友新聞の「随想」欄に「文知摺観音」というタイトルでエッセイを載せた。数日後、職場に電話がきた。文知摺観音の入り口にある普門院の〇〇さんだという。ご住職のお母様ということだった。民友新聞を読んでくださったとのことで、いたく感動していただけたらしかった。私はというと、わざわざご丁寧にお電話をいただいたことに感激することとなった。

文知摺観音に行き、直接、お礼を言いたくなった。そういうわけで、出かけることにした。この日は、穏やかな晴天に恵まれた。風がなく、寒くもない絶好の紅葉日和だった。ただ、見頃が過ぎてしまっていることはわかっていた。1週間前がベストだった。

駐車場に着いた。車がいっぱいだった。予想以上に人が多かった。ここで、考えた。もしかしたら、民友新聞を読み、来てくださった方もいるかもしれない。そうであれば、ちょっとうれしい。

入り口のイチョウは見頃を過ぎていた。中へと進むと、モミジは綺麗なのだが、見頃のピークではないことは明らかだった。それでも、十分に紅葉を味わうことができた。

この前、文章に書いた場所だと思うと、また格別の味わいがあった。人がどんどん入っていく建物があった。「床もみじ」である。綺麗なモミジが、ピカピカに磨かれた床に映る。借景である。窓から見えるモミジを絵画のように美しく切り取ることができる。次から次へと、写真を撮る人が絶えることはない。

文知摺観音と言われている敷地を一通り巡った。普門院がどこなのかがわからない。社務所で聞いてみた。すると、どうやら近くに安洞院があり、そちらにいらっしゃるとのことだった。案内された方向に歩き出した。程なくして、安洞院600M先という案内板が見えた。意外と遠かった。駐車場に戻り、車で行くことにした。

やっぱり車にしてよかった。すぐ近くではなかった。安洞院は、立派なお寺だった。普門院・文知摺観音とは対照的な趣だった。人がおらず静かだった。こちらにも綺麗なモミジがあった。ちょうど見頃だった。

案内所らしき建物にお邪魔した。事の経緯を説明した。すると、ご住職と奥様が来てくださった。お電話をくださったお母様には会うことは叶わなかった。突然の訪問にもかかわらず、ご住職が我々を案内してくださった。

床もみじは、若葉の季節には、床若葉になることを知った。絵葉書になった写真も見せていただいた。もみじとは違った味わいがあった。樹齢450年にもなる、しだれ桜のことも教えていただいた。安洞院は、お寺さんなのだが、桜や若葉の季節、そして秋の紅葉シーズンには、穴場の存在になることを知った。

高台にあるため、福島盆地を一望することができた。西側から福島盆地を見ることには慣れている。一方、東側からとなると、あまり見る機会がない。それだけに新鮮だった。急な訪問だというのに、とても親切にいただいた。かえって恐縮してしまった。

この日、文知摺観音を訪れた人たちは、みな穏やかな表情をしているように見えた。まさしく錦秋である。紅葉日和の、こんな穏やかな一日があってもよいと思えた。安洞院の皆様のおかげで、そう思うことができた。